

私の宝物 ～『小泉今日子書評集』～

校長 大沼 敏美

2020年はコロナ、コロナに明け暮れた一年だった。本校も5月半ばまで臨時休校が続き、この間、私は学校と家の往復ばかり。ゴールデンウィークはどこにも出かけず、せつかく時間があるのだから料理や掃除でもと考えたが、そもそもこの二つは大の苦手。レシピを見ながら作った料理は「鶏肉のトマト煮」と「チンジャオロース」だけで、大掃除の方も本棚を整理して終わった。しかし、本棚の整理中、宝物を二つ見つけた。一つは一万円札が2枚入った封筒、もう一つは『小泉今日子書評集（中央公論新社）』である。

私は小泉今日子（以下、「キョンキョン」という。）の大ファンである。キョンキョンは今でいえば、広瀬すず、あるいは橋本環奈といったあたりだろうか。1980年代、松田聖子と中森明菜がアイドルの双璧で、それに続くのがキョンキョンだった。大胆なショートヘアで歌った『まつ赤な女の子』。その姿はたまらなくキュートで、見るたびに卒倒しそうになった。教員になってからもその思いは変わらず、担任をしているクラスの目標を『なんてたってアイドル♪』と、キョンキョンの歌の題名をそのまま借りたりしたこともあったが、生徒たちは上手く（適当に？）私の趣味に付き合ってくれていた。

アイドルとしてのキョンキョンについてはこれくらいにして、『小泉今日子書評集』に話を戻そう。この本は、2005年～2014年に『読売新聞』で掲載された97冊の書評をまとめたものである。キョンキョンは中学校を卒業するとすぐデビューしたため、高校を出ていない。それでもこんなに流暢で心に響く文章が書けるのは多読家だからだろう。それではどうしてキョンキョンは本を読むようになったのか。その答えはこの本の「まえがき」にあり、アイドルとして忙しかった10代の頃、人と話をするのも億劫でいつも本を開くようになったらしい。「どうか私に話しかけないでください。そんな張り紙代わりの本だった。」と。そして、本を読み終えるたびに、「心の中の森がむくむくと豊かになるような感覚があった。その森をもっと豊かにしたくなって、知らない言葉や漢字を辞書で調べてノートに書き写すようにした。」とも。この「まえがき」だけでも読む価値のある一冊である。

書評の中から、キョンキョンらしさが出ている文章を抜き出すと、

○アカの他人同士がたった紙切れ一枚で夫婦になる。そしてまた紙切れ一枚で離婚する。とても簡単なことである。でも、それだけでは長い月日を共に生きられない。夫婦っていったいなんなのだろう？それが分かっていたら私も二枚の紙切れに判子を押すことはなかったのだろう。（椰月美智子『枝付き干し葡萄とワイングラス』）

○四十歳を過ぎた私の人生の中で、やり残したことがあるとしたら自分の子供をもつことだ。時間に限りがあることだから、ある年齢を過ぎた女性なら一度は真剣に考えたことがあると思う。家族の再生を描いた心優しいこの物語を読んで、私はそんな思いから少しだけ開放された。(伊吹有喜『四十九日のレシピ』)

こんなふうに、紹介した本を通して、赤裸々に自分の不安や迷いを語り、素っ裸のキョンキョンを見せられたようでドキッとしてしまう。そういえば、令和2年5月には『検察庁法改正案』の政府の姿勢をめぐりツイッターで抗議運動を展開していたが、キョンキョンは幾つになっても真つすぐで、ファンはいつもハラハラドキドキさせられるのである。

ちなみに、断捨離した私の本棚にキョンキョンが書評として取り上げた本が一冊だけある。『世界で一番美しい猫の図鑑(エクスナレッジ出版)』は一冊4000円もするととても貴重な本で、実はキョンキョンと同じくらいに、私は猫が大好きなのだ。